西村くにこ 県政報告

NO. 56

発行：2026年 春　通算第56号

ご意見、ご感想をお聞かせください。
電　話：045−210−7630　ＦＡＸ：045−210−8912
メール：925@nishimura-kuniko.com
発行者：西村くにこ
連絡先：横浜市中区日本大通り１番地



［プロフィール］2011 年神奈川県議会（川崎区）に初当選。現在、４期目。総務政策常任委員会副委員長／公明党神奈川県議会議員団団長／社会福祉法人川崎いのちの電話評議員／防災士／骨髄バンクドナー登録説明員／認知症サポーターキャラバンメイト／こころサポーター（メンタルヘルス普及促進）／心のバリアフリー推進員（障害者理解促進）／保護司

県議会代表質問からの報告

孤立を防ぎ、つながりを創る。～神奈川県に『心の居場所』を～

近年、“居場所”という言葉をよく耳にします。居場所とは、子どもから若者、高齢者、障がいのある方、ひきこもり状態の方まで多様な人々が、安心感を持って過ごし、社会とつながりを持てる場所を指すだけでなく、人とのつながりや関係性を含む概念をも意味します。居場所を求める気持ちの背景には、終身雇用の安定性が揺らぎ、親戚とは疎遠になり、兄弟は少なく、人生におけるさまざま選択を誰かと分かち合うことが難しくなった不安定な社会があります。

孤独と孤立が加速するいま、「ここにいていいんだ」と自分を受容され自己肯定感を育む居場所、他者との関わりのなかで「自分は誰かの役に立っている」と自己有用感を得られる居場所が求められているのではないでしょうか。代表質問では、神奈川県における有形無形の居場所づくりに繋がる具体的な８つ提案をお示ししました。



代表質問に登壇する**西村くにこ**

災害時にも支えあえる居場所づくりを！

近年の自然災害では災害関連死の割合が高まっており、避難生活における孤独・孤立が大きなリスクとなっています。これを防ぐには、地域住民が日頃から利用する施設を拠点とし、平時から顔の見える関係を築いておくことが重要です。

能登半島地震から学ぶ

昨年１２月、**西村くにこ**は石川県輪島市の施設「輪島カブーレ」を視察しました。ここでは能登半島地震の際、いち早く復旧した温泉が、被災した方々の再会と励まし合いの場となりました。この仕組みを活かし、近隣３か所に建設された仮設団地にも、公衆浴場や食堂が併設され、入浴を通じた安否確認や、仕事を失った海女さんの雇用の場としても機能しています。このように共生型のコミュニティは、災害時に高齢者や障がい者など要配慮者の命と暮らしを守る拠点となることが期待できます。



仮設団地に併設するコミセン鳳至 BASE



出典：社会福祉法人佛子園

「ともいきステーション」を開設！

西村くにこは、神奈川県内でもこうした「災害に強い地域コミュニティづくり」を進めるよう求めました。これに対し知事からは、日常の「いつもの場所」が災害時に互いを支え合う「もしもの場所」となることを目指すモデル事業を実施するとの答弁がありました。具体的には、居場所づくりに取り組む団体へ防災や地域づくりの専門アドバイザーを派遣し、備えの強化や地域連携を図ります。また、これらの拠点を「ともいきステーション」と名付けて見える化し、先進事例として紹介することで、この共生の考え方を県内全域へ広めてまいります。